

CineXion

シネマ

シネラ・ニュース
April.2001 No.57

特集

短編ドキュメンタリーの世界

特集

浦山桐郎監督特集

4



「私、ダボハゼなんかじゃないから」。
芯の通った口調でスクリーンから訴えてくる吉永小百合。
あどけないけど、ただ者でないオーラを感じた。

『キューボラのある街』 イラスト&文:山下良平

短編 ドキュメンタリーの世界

特集

会 期：4日(水)～8日(日)

観覧料：500円(大人)

400円(大学生・高校生)

300円(中学生・小学生)

- 定員制、各回入替制。
- チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。
- 福岡市在住の障害者の方は無料、福岡市在住の65才以上の方は半額。(手帳の提示が必要です。)

短編ドキュメンタリーはその多くが映画館以外の場所、例えば学校や移動上映会の会場、研修施設などで上映されることを前提として作られています。また、その利用目的も様々です。企業や産業のイメージアップなどを目的としたもの、学校の授業での利用を目的としたもの、会社や特定の職種の研修などでの利用を目的としたもの、社会運動に対する理解を深めてもらうことを目的としたものなど、多種多様な作品があります。

興行収入を主な収益とする劇場用の映画とは異なり、こうした作品はその目的に応じて「教育映画」、「教材映画」、「科学映画」、「産業映画」、「PR映画」などの様々な呼称があります。またこうした作品群の総称として「文化映画」と呼ぶこともあります。いずれの場合も、その利用目的などに基つた呼称であるためにアニメーションや劇映画なども含まれますが、その主流はやはりドキュメンタリーだといえるでしょう。

また、戦後スタジオシステムの崩壊などにより、職業として映画製作に携わる機会が減っていった時代に、多くの若い才能がこうした教育映画や産業映画を製作する映画会社から輩出されています。その中には、小川紳介や土本典昭といったドキュメンタリスト以外にも松本俊夫や羽仁進、黒木和雄や東陽一といった多彩な映画人があげられます。

今回の特集では、こうした短編ドキュメンタリーの代表的作品を上映いたします。多くは特定の利用目的のために製作された作品ですが、それだけにとどまらないドキュメンタリーの本質的魅力や、映像としての美しさを持つ作品群です。



法隆寺



絵を描く子供たち

A 4日(水)14:00 8日(日)11:00
芸術家達の仕事

芸術家や伝統芸、職人芸の世界を記録する。芸術家達の本質を作業風景や彼らの生み出した作品を通して探り、伝えていく。それは芸術表現の本質に迫ろうとする試みでもあり、ドキュメンタリーの本質でもあるだろう。

法隆寺

1958年/35ミリ/カラー/23分/岩波映画

●羽仁進

彫る・棟方志功の世界

1975年/35ミリ/カラー/39分/毎日映画社

●柳川武夫

歌舞伎の立廻り

1981年/16ミリ/カラー/34分/桜映画社

●藤原智子

B 4日(水)19:00 6日(金)14:00
科学する眼

科学は歴史や自然の謎、神秘を解き明かしていく。そのためには細心の注意と地道な努力、合理的な思考が常に求められる。こうした科学的な態度によって未知なる世界を映像で解説していく。



生命誕生

月の輪古墳

1953年/16ミリ/モノクロ/29分/月の輪古墳映画製作委員会

●荒井英郎

かえるの発生

1955年/16ミリ/モノクロ/11分/岩波映画

●吉田六郎

マリン・スノー

1960年/35ミリ/カラー/25分/東京シネマ

●野田真吉、大沼鉄郎、春日友喜

生命誕生

1963年/35ミリ/カラー/17分/東京シネマ

●渡辺正己、大島正明

生命の流れ

1968年/35ミリ/カラー/26分/電通映画

●樋口源一郎

C 5日(木)14:00 7日(土)11:00
様々な生活

古い民家や浮世絵などに残された江戸時代の暮らし、海底炭坑で採炭作業に従事する人々、様々な環境の中で人は生き、暮らしてきた。その中には生活の知恵や工夫が満ちている。

日本の民家

1962年/35ミリ/カラー/36分/英映画社

●赤佐政治

絵図に偲ぶ江戸の暮らし

一吉左衛門さんと町の人々

1978年/16ミリ/カラー/33分/岩波映画

●時枝俊江

海底炭鉱に生きる

1983年/16ミリ/カラー/54分/RKB映画社

●野崎健輔

D 5日(木)19:00 7日(土)15:00
自然を見つめる眼

自然は映画にとって最も古典的なモチーフの一つといえる。しかし、そこに向けられる視線は時代とともに変化してきた。自然や古くから伝わる神事を通して、自然と人間との共生を模索する。

或る日の干潟

1940年/35ミリ/モノクロ/18分/理研

●下村兼史

干潟のある海一謙早湾 1988

1992年/16ミリ/カラー/52分/イワブロ

●岩永勝俊

照葉樹林での山の祭 -九州中央山地の神楽-

1997年/16ミリ/カラー/39分/オフィス・フィフティ・ワン

●下坂利春

E 6日(金)19:00 8日(日)15:00
教育を考える

子どもの側からではなく、大人達の視点から子供たちを観察し、教育問題を取り扱った古典的名作。戦中から戦後あまりたっていない頃の作品だが現代に通じる視点と問題意識があることに驚かされる。

或る保母の記録

1942年/16ミリ/モノクロ/35分/芸術映画社=東宝

●水木荘也

教室の子供たち

1955年/16ミリ/モノクロ/29分/岩波映画

●羽仁進

絵を描く子供たち

1956年/16ミリ/カラー/38分/岩波映画

●羽仁進

28日(土)14:00
29日(日・祝)17:30

Hiko-syojo

非行少女



故郷の金沢に帰ってきた三郎は、幼なじみの若枝と再会する。三郎と若枝の間には恋愛感情が芽生えるが、彼女は貧しい環境の中で、すさんだ生活をしてきた。そして彼女は非行少女の保護機関である学園に入れられてしまう。和泉雅子が素晴らしい演技を見せる秀作で、モスクワ国際映画祭金賞を受賞。

出演：浜田光夫 和泉雅子

1963年/35ミリ/モノクロ/114分/日活

29日(日・祝)13:30
30日(月・休)16:30

Seisun-no Mon

青春の門



五木寛之の小説「青春の門」の第一部「筑豊編」を映画化した作品。大正から昭和の筑豊を舞台に、炭坑事故で夫を亡くしたタエと息子・信介の物語。子供から青年に成長し上京するまでの信介の成長の過程が、激動の大正・昭和史に重ねて合わせて描かれる。浦山桐郎監督の演出も高く評価されている。

出演：仲代達矢
吉永小百合
田中健

1975年/35ミリ/カラー/188分/東宝

28日(土)11:00 30日(月・休)13:30

キューポラのある街

Cupola-no aru Machi



鋳物の町・埼玉県川口市。職人気質のガンコな父親石黒辰五郎と、長女ジュンを中心にした家族の物語。不況で会社を解雇される父親、貧しい家庭の中で進学か就職かに悩むジュンなど、当時の社会状況を反映しており、さわやかな感動を呼ぶ作品。浦山桐郎監督のデビュー作で、当時16才だった吉永小百合の魅力に溢れる作品。

出演：吉永小百合 浜田光夫

1962年/35ミリ/モノクロ/99分/日活

浦山桐郎監督特集

会 期：28日(土)～30日(月・休)

観覧料：500円(大人)
400円(大学生・高校生)
300円(中学生・小学生)

※定員制、各回入替制。

※チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。

※福岡市在住の障害者の方は無料、福岡市在住の65才以上の方は半額。(手帳の提示が必要です。)

浦山桐郎は1930年、兵庫県相生市に生まれている。名古屋大学文学部仏文科を卒業し、日活に入社。川島雄三、今村昌平の助監督として活躍する。62年「キューポラのある街」で監督デビューを果たす。この作品は日本映画監督協会新人賞、日本映画記者会新人監督賞、キネマ旬報ベストテン第二位など高い評価を受け、一躍期待の若手監督となる。63年の監督第二作「非行少女」はモスクワ国際映画祭金賞を受賞。巨匠への道を歩むかに思えたが、熟考型の製作に加え会社とのトラブルなどから第三作「私が棄てた女」まで5年余の歳月を要し、日活を退社する。さらに6年を経て75年「青春の門」、76年「青春の門 自立編」、79年「龍の子太郎」、80年「太陽の子・たのふあ」、83年「暗室」、85年「夢千代日記」を監督する。85年急性心不全により死去。

浦山桐郎監督が生涯に残した作品はわずか9作品に過ぎない。しかし吉永小百合、和泉雅子、大竹しのぶ等を育てた手腕から、「女優育ての名手」と言われ、また映画界きっての酒豪として多くの逸話を残す監督であった。何より60年代に監督した3作品は、地味ながらもその時代の中でキラリと光る名作として、同時代の多くの人々の心に残る作品であり、60年代という時代を代表する監督の一人であったことは疑いようがない。

28日(土)17:00
30日(月・休)11:00

Watashi-ga suteta Onna

私が棄てた女



自動車部品の会社に勤める吉岡は専務の姪のマリ子との結婚を控えていた。ある日吉岡は、学生時代に付き合っていたミツが、吉岡に棄てられた後、子供を中絶していたことを知る。罪悪感から再びミツと会う吉岡だが…。遠藤周作の人気小説の映画化で、愛や人生について示唆に富んだ作品となっている。

出演：河原崎長一郎
浅丘ルリ子

1969年/35ミリ/パートカラー/116分/日活

29日(日・祝)11:00

龍の子太郎

Tatsu-no ko Taro



昔々、貧しい村の少年・太郎は祖母から彼の母が龍になったと聞かされ、その龍の住む北の湖に向かって旅をする。そして湖で龍の姿の母と出会った太郎は、貧しい土地に湖の水を流すように頼むのだった。原作は民話をもとに書かれた松谷みよ子の児童文学で、映画は骨太の感動作となっている。

声の出演：吉永小百合 北村和夫

1979年/35ミリ/カラー/アニメーション/75分/東映動画

R80 古紙配合率80%再生紙を使用しています。